

---

# おみくじ すくらんぶる！

七海くれは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おみくじ すくらんぶる！

### 【Nコード】

N57750

### 【作者名】

七海くれは

### 【あらすじ】

何の変哲もない、普通の神社。その名も、小野瀬神社。このどこにでもある神社には、不思議な噂があった。『おみくじに書かれている事が本当になる』という噂が。

神社の娘、小野瀬御供。

普通の少年、叶信二。

共通点のない彼らを結び付けたものも、おみくじ。結び付いた彼らを引き離すものもまた、おみくじ。

勝つのは人か、おみくじか。

おみくじに定められた運命を、打ち破れるか。

ちなみに、この物語にバトル要素は少ししかございません。

## 序章：末吉 身近に潜むものなり

栄えているといえれば栄えており、のどかだといえばのどかでもある。

ここ笹宮市はそんな、まったりとしている場所であった。ただ一箇所、とある噂の立っている神社を除いては。

小野瀬神社の朝は、早い。

日も昇らぬうちから境内の掃除を始めるは、この神社の宮司である小野瀬慎幻。

彼には娘がおり、名を小野瀬御供といった。御供と書いてミクと読む。

字だけを見ると昨今のDQNネームにしか見えないが、響きが良かったためか本人は気に入っている。

母親はおらず、その分父親が二人分の愛情を注いで育ててくれた。その結果、それはそれは立派なボクっ娘に育ったという。

そんな彼女は、ごく普通の高校一年生。

ここから自転車で15分ほどの距離にある高校に通う彼女は今、夏休みの真っ最中であった。

御供は夏休みだからといって夜更かしをするような悪い子ではないため、早起きして父親の仕事を手伝っているのだ。

この小野瀬神社には、不思議な噂がある。

それは……：……このおみくじに書かれていることは必ず本当になっ  
てしまう、というものだった。

『おみくじのおかげでお金持ちになれた！』『キメメンのオリも毎日モテモテ！』『うつ病が治った』という声がごく一部で拳がっているのは確かだ。

さらには『犬に噛まれたShite!』『声優ライブのチケット落とした!』『ハロワ行きたくない……』』という声もあるので、いい意味でも悪い意味でも信憑性は高い。

そのおみくじは、よくあるおみくじ用の自動販売機に入れられており、100円を入れてボタンを押すと出てくるものだ。

中身のおみくじを作っているのは小野瀬神社ではなく、依頼した業者であるというなんとも夢のない話である。

境内の掃除を終えた御供は続いて、二人分の朝食の準備を始めた。母親がいないので家事は父親と分担してやっているが、父は料理だけはどうしてもできないようなので自分がやるしかないのだ。

と、その時だった。テーブルの上に置いてあった御供の携帯が鳴動し、テーブルの上をのたうち回った。

彼女は調理の手を止め、それに対応する。

「もしもし? あー、セーラ? どしたの?」

「ごきげんいかがかしら、おともさん?」

「こらー! おともってゆーな!」

電話の相手は友達のようなのだ。その友達にあだ名で呼ばれて憤慨する御供。

彼女の名前は普通に読むと『おとも』だが、本人はそう呼ばれることをあまりよく思っていないらしい。

しかし電話の相手……セーラこと瀬良亜莉沙は悪びれる様子もなく続ける。

「ごめんあそばせ。今日はあなたを遊びに誘おうかと思ってお電話差し上げましたのよ」

「遊びに? 行く行く! 他に誰かいたりする?」

「ええ。ももつちさんも同席してくださるそうよ」

「ももつちも来るの!? 絶対行く! どこ!? どこ行くの!?!」

「あんもつ、おだまり! 実は『おふかい』とかいうものに誘われたのですが、人数を集めてくれとも言われたので困っていたの」

「おふかい？ なんだかよくわかんないけど、行く！」

「ふふん、当然よ。では、10時ちょうどにあなたの家の前まで足労しますわ。おみくじも引かせていただくわよ」

「うん、待ってる！ じゃーね！」

御供は通話を切り、幸せいっぱい顔で調理を再開する。

先ほどの電話での会話で出た『ももっち』とは、彼女らの共通の友人である少女、鬼丸桃代のことである。

小野瀬御供、瀬良亜莉沙、鬼丸桃代。3人合わせて『バカージヨ』と呼ぶ者もいるほど、彼女らはバカであった。

全員、黙っていればそれなりにかわいらしいのだが、以下に挙げる理由によりバカ呼ばわりされてしまうのだ。

御供は舌足らずであり、授業中の回答があまりにも的を外しているために親しみを込めてバカと呼ばれる。

亜莉沙はその性格やしやべり方が一部のクラスメイトにあまり気に入られておらず、親しみのこもった中にほんの少しの悪意を含んでバカと呼ばれる。

桃代は文系の勉強だけならバカどころか優秀と呼べるレベルだが、体を鍛える事が好きなのと前述の2人とよくつるんでいるのでバカと呼ばれる。

だが、すっかり桃代に聞こえるように『バカージヨ』と呼んでしまった場合、その者はもれなく黄泉の世界に送られるという。

月日は唐突に流れ、9月も後半に差し掛かるうとしていた。

小野瀬神社の木々も、そろそろ紅葉のための準備を始めただろうか。

そして彼女は、学校に行く前にこっそりとおみくじを引いていた。神社の娘であっても、おみくじを引く時はちゃんと販売機に100円を入れなければならぬ。

そうしないと必ず当たるとされるおみくじの効果が出ないし、そ

れ以前におみくじ自体も出てこないからだ。  
今回のおみくじの結果は以下の通り。

末吉

総合運：針に気をつけよ

仕事運：他の者と協力すべし

恋愛運：身近に潜むものなり

健康運：暴食に注意

金運：誘惑多し

探し物：余計に見つけづらくなる暗示

勝負運：直感に頼りすぎぬこと

「なにこれ、びみょ〜……。でも恋愛の身近ってどういふことかな？　じゃあ今日はこれ狙ってみよっと」

そう言いながら、スカートのポケットにおみくじを突っ込む御供。

さて、彼女が今『これ狙ってみよっと』と言ったのが気になった方はいるだろうか。

実はこのおみくじ、叶ってほしいものや叶ってほしくないものがある程度コントロールする事ができたりもする。

今回の場合、御供は恋愛の『身近に潜むものなり』に目星をつけ、それが叶うような生活を送ることにしたようだ。

そうする事でその通りになった場合、おみくじに書かれている事が本当になった……と言えるのである。

『小野瀬神社のおみくじが必ず当たる』というカラクリは、この辺りに秘密があるのだ。

ところ変わって、ここは御供たちの通う『私立常関学園高等部』。

中高一貫制度を取り入れているため、高校に進学したとしても中学3年間とあまり環境は変わらなかつたりする。

一応、高等部からの募集もあるが、そうして入学してきた者はまず環境に適応する事から始まるだろう。

それにしても、御供を筆頭としたバカージヨの3人はよくこの学園でやっていけるものだと感心してしまう。

御供が自分のクラスである1-C教室のドアを開けると、そこにはすでに見知った顔があつた。

「おはよー！」

「あら、ごきげんよう。お・と・も・さん？」

「むきー！ だからおともってゆーな！」

「あーもう、ストップ！ 静まれお前ら！ ったく、これじゃまたあたしらバカージヨ言われんじゃん！」

「言われたらももつちがフルボッコにするんでしょ？」

「ん、まーね。あんただけならどーでもいーんだけど、あたしまで一緒にたにされんのはイヤだし」

バカージヨの一人、鬼丸桃代が力こぶを作りながら言う。

彼女は確かにバカ呼ばわりされるほど絶望的な成績でもないし、現代国語や古典に関してはむしろ優秀と評してもよいレベルでもある。

だが他の教科が壊滅的なため、平均的に見ると『多少は他の2人よりまし』な程度まで落ちてしまうのでバカージヨ呼ばわりされるのだ。

「あつ、そうそう。ボクね、行く前におみくじ引いちえきたの」

ここで御供は、なんでもないとこで言葉を噛む。

今後も彼女はたびたび噛み続けるが、その度に書き表していきりが無いので以後は通常の表記をさせていただくをご容赦願う。

「またその話？ あたしシャドーしてくるわ」



「脳筋さんは放つといて、わたくしたちだけで話しましょ。で、どうでしたの？」

御供が今朝引いたおみくじを話題に出すと、占いに興味のない桃代はさっさと席を外してしまふ。

対照的に頭の中は占いのことでいっぱいのスィーツ少女、亜莉沙は興味津々だ。

御供は多くを語らず、引いてきたおみくじを亜莉沙に見せた。

「末吉い？ パツとしませんわね。どれですか？ 気になるのは「恋愛のどこ。身近ってどういうことかなって」

「恋愛……。あー、ミクさんちよつといいかしら。あのですね、このおみくじの恋愛運は当たりませんことよー！」

「なんだよそれ！ うちのおみくじをデイスるのか!?!」

「デイスってなんかいませんわ！ わたくしは『おみくじマイスタ』として言わせてもらってるだけですわ！」

「じゃあセーラは今まで恋愛のが当たったってことないの？」

「ないわよ？ 今まで何回あなたとこのおみくじを引いたと思ってますの？」

亜莉沙はこんな性格のためか友達が少なく、いつも教室の隅っこで占いをやっているようなオカルト少女だ。

いつかは占いの素晴らしさを認めてもらうべく、日々色々な占いに手を出しては痛い目を見ているという。

そんな中、書いてある事が本当になるという小野瀬神社のおみくじに出会った彼女は、その効果を自らの身をもって実証している。

健気な営業活動が身を結んだか『小野瀬神社のおみくじは当たるぞ』という噂は小さくも、しかし確実に広がっている。

そんな彼女が言うのだから……と、御供は納得しかけてしまふ。

「でも、うちのおみくじはちゃんと当たるもん！ 恋愛だからって差別なんかしないよ！」

「んなことはわかってますわー！ 意見の一つなのだから気にしては負けですよー!?!」

亜莉沙は、思わず身を乗り出してきた御供の頭を撫でながら、彼女の引いたおみくじに再度目を通す。

「身近に潜む……ねえ。ミクさんに心当たりはありませんの？」

「心当たり？ うーん……。ボクの席の近くでいいのなら、すぐ隣の叶くんかなあ」

窓際の一行に席がある御供は、右隣の男子生徒……叶信二を思い浮かべた。というより、すでに着席していたのでそちらを見た。

まあ、どこにでもいる普通の少年だ。しかし、それ以外の情報がない。

交友関係、部活、性格、趣味……などの情報を、御供は何一つ知らなかった。

「あはは、なーんにもわかんないや」

「はあ……前途多難ですわね」

「セーラはなんかわかんない？ ももっちは？」

「わたくしも知らないわよ、あんな没個性人間。ももっちゃんも知らないと思いますわ」

「そっか……。じゃあ自分でなんとかしなくちゃね。ありがと、相談に乗ってくれて」

「べつ、別にお礼なんかいいわよ！ 実際なんにもしてないようなものですし……」

亜莉沙がデレ始めたころ、バカージョ2人にディスプレイされたさえない少年の信二きゅんは携帯ゲームを楽しんでいた。

「3Vで妥協かなあ……」

## 第1章：大吉 手に入れたら手放してはならぬ

この日の御供は、いつにも増して集中力がなかった。

おみくじの結果を本当にするべく、隣の席の男子生徒……叶信二の様子を観察していたからだ。

だが、見る限りでは本当に何も特徴を見つけれない。

授業中に積極的に発言をする事もなければ、寝たり早弁をするといった事もない。

休み時間には一応1人の友人と会話をしていたりするが、それ以外は特筆すべき箇所がない。

そこで御供は桃代を伴い、信二の友人である手塚廉太郎に話しかけた。

「なあ手塚、ちよつといい？」

「なに……つて、ひいひいひい！！ な、泣く子も息が止まるほどの威圧感を持つという女傑、鬼丸桃代！？」

「はあ！？ なんだよその嫌に説明口調な怖がりようは！ つて！

机の下に隠れるなー！ あたしや猛獣か！」

「ひいひいひい！！！！ 命ばかりはお助け〜！ バカージョなんてもう言わないから〜！！！！！」

「ダメだこりゃー、次行つてみよう」

「ミク……。なんであたし呼ばれたの？」

「ももつちになら何でも話してくれると思ったの。でも余計に怖がらせちゃったみたい」

「見ての通りじゃんよ、あたし軽く凹んだぜ！？」

「じゃあ次はボク一人で聞いてみるね。ありがと、ももつち」

「……おー」

自分の恐ろしさを徐々に実感した桃代は、生気のない声で返事をした。



桃代はろくすっぽ事情も知らず『こいつがやったんだ』と決め付け、彼の襟首を乱暴に引つつかんだ。

「お前も来いや！ ミクいじめたのおめーだろオルア！」

「い、いじめただなんて誤解だよ！ 確かにぼくが小野瀬さんにヘッドバッドかましたみたいだけど……」

「やっぱりいじめたんじゃないやありませんの！ このマスク・ド・キチク！」

「いや、マスクなんてしてないんだけど……」

「ひぐっ……えぐっ……。痛いよう、痛いよう……」

「よしよし、もう大丈夫ですわよ。さ、保健室行きましょう」

桃代は信二を、亜莉沙は御供をそれぞれ引きつれ、教室をあとにした。

保健室で見てもらったところ、口内に切り傷ができてしまったようだ。

その応急処置をしてもらっている間、桃代と亜莉沙は信二に食って掛かっていた。

「おおおう！ よくもあたしらの友達を傷物にしてくれたなあ！？ どういうつもりなんだよっ！？」

「かわいそうなミクさん……。女の子に、しかもアゴにヘッドバッドだなんて……」

「だから違うんだって！ お願いだからぼくの話も聞いてよ！」

「へえ、なんか理由があるってかい。いいよ、聞かせてもらおうじゃない」

「……さっきさ、プリント配ってたでしょ。その時に小野瀬さんがペン落としたんだよ。彼女、それに気づいてないみたいだったから拾ってあげようとしたら……」

「待ちな。なんでそこからミクにヘッドバッドかますことになるのさ」

信二の話の腰を折る桃代。彼への眼光をさらに鋭くしつつ、返答

を待つ。

「だから……ぼくが拾った直後に小野瀬さんの手が伸びてきて、なんだろうって思って頭を上げたらそこに彼女のアゴが……」

「待った！ 異議ありですわー！」

「またも中断させられる、信二の言葉。今度は亜莉沙が話の腰を折った。」

「ミクさんがペンを落としたのでしょう？ だったら本人が拾おうとするのは当たり前じゃないですよー！ なんだろうって思うのはおかしいと思いませんか？」

「言われてみればたしかにそうだ。やっぱりわざとかてめえ！」

「……わかったよ。ぼくが悪人でした。でも、わざとじゃないってのだけは信じてほしい」

「いまいち誠意が感じられないけど、非を認めただけよしとするかな、セーラ」

「まあ、そうですね。あと、叶。わたくしたちに謝っても仕方がありませんことよ。ちゃんと本人にお謝りなさいませー！」

「も、もちろん。わざとじゃないにしろ、泣かせちゃったのは事実だし」

「だな。わざとじゃないってのだけは信じてやるから、ちゃんと本人に謝りな」

「多少ではあるが誤解を解いた信二は、すっかり泣き止んで応急処置も終わった御供に近づいた。」

「そして、ばつが悪そうに口を開く。」

「あ、あの……さ。小野瀬……さん？ さ、さっきは……ゴメン。痛かった……よね？」

「しゅっごいいらかったらー！ くひからひもでひゃったし……（すっごい痛かったー！ 口から血も出ちゃったし……）」

「元から舌足らずでたどたどしい御供のしゃべりが、アゴをやられたことでさらに聞き取りづらくなっていた。」

「信二はそれを重く受け止め、勢いよく頭を下げた。ちなみにこの」

時は誰にも当たらなかつた。

「ごめんなさいっ！ 本当に、申し訳ない！」

「ひや、そんなあらまさげなくれもいよいよ。ね？（いや、そんな頭下げなくてもいいよ。ね？）」

「う、うん……」

時折アゴを押さえる姿が痛々しいが、まさに神がかつた笑顔で信二を許した御供。

後光が差さんばかりに輝かしいその姿に、彼はしばし見とれていった。

そんな空気を、バカージョ2人が壊してしまう。

「ミク！ もう大丈夫なの？ もう痛くない！？」

「安心なさいませ。この事実は一生涯あいつをゆするネタとして使えますわ」

「うん、ちよつろいらいけどもうらいりようぶらよ。うー、でもしらがまわりやない……（うん、ちよつと痛いけどももう大丈夫だよ。うー、でも舌が回らない……）」

「だってさ。やい叶、お前はミクをこんな目に遭わせたんだ。わざとじゃないってのは信じてやるけど、あたしはまだ完全に許したわけじゃないからな」

「べーだ！！ ミクさん、行きますわよ」

桃代と亜莉沙は最後まで信二を責め立てたまま、御供を2人で支えるようにして教室に戻っていった。

残された信二は……なんと、萌えていた。

「小野瀬さん……かわいかったなあ……」

真性DMの彼は、悪口をいくら言われたとしてもまったく傷つかないのだった。

そして昼休み。バカージョの3人はいつものように同じ場所に固まって昼食を広げていた。

しかし先ほどの件もあってか、御供の食が進んでいない。

「ミク、食べないの？」

「ももつちさん、ミクさんは先ほど口の中を切ったのよ。痛くて食べられないのではないかと」

その様子を察した桃代が心配して尋ねると、亜莉沙が先に答えた。「あ、そうだったね。それにしてもひどいねあいつ。何も口ん中切るくらい勢いよく頭上げなくてもよくね？」

「わざとじゃないんだから、あんまり責めないであげて。確かに痛かったけど……」

「あーんもう！ この子つてばなんでこんなに優しいのですのー！  
？ むぎゅー！」

「わっ、セーラなに〜？」

いきなり御供に抱きついた亜莉沙。その拍子に御供は制服のポケットに入れていた何かを落としてしまった。

「あ、ミクなんか落としたよ。……うえ、おみくじじゃん！」

早々と自分の分を食べ終わっていた桃代がそれを拾ったが、それは御供が今朝引いていたおみくじだった。

拾ってすぐ、近い位置にいた亜莉沙に手渡すと、亜莉沙はそれを見て何かに気がついたようだ。

「……はっ、ミクさん。ちょっとこれ見てくださらない？」

末吉

総合運：針に気をつけよ

仕事運：他の者と協力すべし

恋愛運：身近に潜むものなり

健康運：暴食に注意

金運：誘惑多し

探し物：余計に見つけづらくなる暗示

勝負運：直感に頼りすぎぬこと

「これって？ ああ、今朝引いたおみくじだよ。これがどうした



の？」

「健康運のところを見なさいませ。今、ミクさんはあまり食べられないでしょう」

「う、うん。あつ、じゃあその心配はもうしなくても……」

「おっけーですわ。金運のも、まっすぐ帰れば誘惑の心配はないでしょうし。今日はまっすぐ帰るのでしょう？ 痛いことから」

「そうだね。まっすぐ帰っておとなしくしてるつもり」

「はあ、いっつもただけで強引すぎるんだよな。たかがおみくじによくそこまで入れ込めるもんだわ」

「ももつちさん、お黙りなさいませ。わたくしの趣味をデイスるのは許しませんことよ」

「はいはい、そいつは悪うござんしたねー」

その頃、少し離れたところでは信二と廉太郎が食事をしていた。

机の上に並べられた菓子パンや惣菜パンが、彼らの財政状況を物語っているようだ。

「じゃあオレはまずメロンパンから……。それはそうと信二、大変だったなー」

「まあね。でも小野瀬さん、やっぱかわいいんだ。あ、ぼくはコロツケパンね」

「なに、萌えちゃったわけ」

「かもねー」

「でも難しくね？」

「なにが？」

「いや、その先。お近づきになるとしても他のバカージョのガードが……はっ……！」

廉太郎は今、軽く死を覚悟した。

このクラスにいながら『バカージョ』という単語を口にすることはすなわち、保健室への片道切符を押し付けられることになるからだ。

かぶりついていたメロンパンが、重力に従い落ちてゆく。

もはや彼は、口を動かすことすら出来なかった。

「また口を滑らす……。じゃ、このあんパンぼくのね」

低脂肪牛乳を飲みつつ、廉太郎が食べるはずだったあんパンに手を伸ばす信二。

目の前の親友が三途の川の淵にいるのに、なんと薄情なのであるうか。

いや、決して薄情なのではない。彼がどうこうしたところで、結果が変わらないことを知っているからだ。

廉太郎もちろん、信二の助けを求めているわけではない。

下手に助けを求めても、犠牲者が増えるだけということを知っているからだ。

そしていよいよ、NGワードを口にしたことへの断罪が始まるうとしていた。

バカージョの一人、鬼丸桃代の手によって。

「……………」

廉太郎は目を閉じた……………が、遅かった。

閉じようとしたその瞬間、目の前の強大な敵はすでに行動を起していたのだ。

そして、桃代が口を開く。

「5時間目、叶にノート取ってもらっただね」

それと同時に、廉太郎が音を発する。

声ではなく、音を。

「びよらー!!」

数秒後、何事もなかったかのように他のバカージョとの会話を再開した桃代と、先ほど落としたメロンパンに顔をうずめた廉太郎がいた。

「終わった〜!」

誰が言ったか、本日の授業の終了を告げる声。

ほとんどの高校生が、最も生き生きする時間帯である。バカジョの3人もその例に漏れず、本日で最高の顔を見せていた。

「さて！今日はどうする？」

「どうするもこうするも、今日はミクさんを気遣わねばなりませんことよ！？」

「あちゃ、そうだったね。どうするミク、あたしら家まで送ろうか？」

「いいよ、大丈夫。ももっちはセーラと一緒に帰ってよ」

「ミクさんがそう仰るなら……。ももっちゃん、よろしくて？」

「しゃーねーな、今日はセーラにつきあってやるよ。で、どこ行く？」

「今日は移動式のクレープ屋の巡回日です。そこの気まぐれクレープを食べますのよー！」

「お、いいねえ！たまには甘いもん解禁すつか。じゃミク、あたしら先行くよ」

「うん！今度はボクも誘ってね！」

「もちろんですのよー！さ、ももっちゃん行きますわー！」

「おーっ！」

言づが早いか、亜莉沙と桃代はさっさと教室を出て行ってしまった。

残された御供も、今日はまっすぐ帰ることにしたようだ。

時間は午後4時。小野瀬神社は今日も静かだった。

そんな静かな境内に見知った顔があった。

ここで見たことのある顔と言えば、真っ先に思いつくのは亜莉沙か父親くらいなものだ。

だが今日に限ってはそのどちらでもなく、信二であった。

珍しく思ったか、御供は彼に声をかけていた。

「叶くん！」

「あつ、小野瀬さん！ そうだ、ここつて小野瀬さんの家だっけ」

「そうだよ。神社の子だから、たまに巫女もやるよ」

「巫女……かあ。うん、そんな小野瀬さんもいいな」

「あはつ、なんだよそれー！ それで、今日はどうしたの？」

「……さっきのこと、もう一度謝ろうかと思つて」

信二は、心底から申し訳なさそうな顔で御供を見た。

彼は、今まで誰かを殴つたり傷つけたことがなかった。

今回は過失とは言え、他人に傷を負わせてしまった。彼は、それが許せなかったのだ。

「今なら瀬良さんも鬼丸さんもいないから、しっかりと謝れる。……」

言いながら彼は跪き、地べたに頭をこすり付けた。

「ちよつと、叶くん！？ な、何してんだよ！？」

「この程度じゃ謝つたうちに入らないのなら、このままぼくを踏んづけてくれても構わない。いやむしろ、踏んで欲しい」

この瞬間、御供は悟つた。この男、ドMであると！ ただのMではなく、真性のドMであると！

そう、叶信二という少年は自身の姉の度重なるDV及び調教により『異性に対しては常にドMでなければならぬ』という哲学を持つてしまったのだつっ！

だから、過失とは言え異性に対して一瞬でもSな面を見せつけたと思つてしまい、そんな自分が許せなくなったのだ！！

そんなバックストーリーがあることなど知る由もない御供はしやがみ込み、彼と同じ目線になつて土下座をやめさせることしかできなかった。

「頭上げてよ。そんなことされても、ボク困つちゃうよ」

「だつて……」

「いいんだつてばっ！ わざとじゃないんでしょ？ じゃあもうい

いの！ ほら、立つて！」

「あつ……」

信二を強引に立たせた御供は、やや上目遣いで話しかける。

「そんなに申し訳ないんだったら、おみくじやってつてよ。1回100円だから」

「そうだね。せっかく神社に来たわけだし……」

「ほら、このちっちゃいお賽銭箱に100円入れてね。入れないで引こつとすると酷い目に遭うみたいだから」

「う、うん。なんだか、イメージと違うな」

「イメージって、どういうの？」

「えっと……こういう筒みたいなものに数字が書かれてる棒が入つてて、振るとその棒が出てきて、書かれてる数字に対応した引き出しからおみくじを取り出してもらう感じ？」

「ああ、それか。それだと引き出しからおみくじを出す人が必要だから人件費がかかるつてお父さんが言つてた」

「そうなんだ。じゃ100円を入れて……このボタンを押せばいいの？」

賽銭箱を模した投入口に100円を入れると、傍らのボタンが光り始めた。押せ、ということなのだろう。

光が示すままにそのボタンを押すと、賽銭箱の下から小さく折りたたまれた紙片が出てきた。

ゆつくりと開かれたその紙には、こう書かれていた。

大吉

総合運：感謝の気持ちを忘れずに

仕事運：面倒ことはすぐに片付けよ

恋愛運：手に入れたら手放してはならぬ

健康運：心身ともに充実するであろう

金運：海老で鯛を釣るが如し

探し物：まず、物をなくさない

勝負運：信じた道を行くべし

「あつ、大吉だつて！ 嬉しいなあ」

「すごいじゃん！ ボクにも見して！」

信二が引いた大吉のおみくじを見た御供は、何かに気づいた。

「えっと、叶くん？ ここのおみくじについての噂って聞いたことある？」

「ん？ いや、聞いたことないな」

「えっとね、実は……書かれてることのどれか一つが本当になるんだ」

「本当に！？ すごいじゃないか！ それって、小野瀬さんだったらどれが本当になるかわかったりしちゃうの？」

「あはは、それは無理だよー。でもね、ある程度はコントロールできるの。これ、今日ボクが引いたやつ」

御供はここで、自分が持っていたおみくじを見せた。

「その恋愛のところ……。今日はそれを本当にしようと思って、叶くんのことずっと見てたんだ」

「えっ……。ぼくのことを？」

「うん。今までほとんど会話とかしたことなかったから、どういう人なのかって。でも、よくわかんなかった。あんまりにも特徴がないんだもん」

「はは……」

「だけど、すごく優しい男の子だってことはわかったつもり。だから……そんな叶くんなら、ボクのお願いも聞いてくれるって思った」

「な、何かな」  
「えっと……ぼ、ボクと付き合ってください！ このおみくじを本当にするために！」

「……」

至上まれに見る、最低の愛の告白が終わった。

気持ちなどかけらもこもっていない、ただ自分の家のおみくじの信憑性を高めるための告白。

おつむの足りない御供は、この行為がいかに愚かであるかにまったく気づいていなかった。そしてそれは、告白を受けた側も同じだ

った。

自分がかわいいと思った女の子から告白された。その事実だけで彼の心は満たされていたのだ。そこに気持ちがこもっていないかろうと。

彼はふと、先ほど引いたおみくじの『手に入れたら手放してはならぬ』という一説を思い出していた。

そして、本当にこのおみくじに書かれていることのどれかが実現し、実現する一説はコントロールできるのならば、この一説を実現させようという考えに至った。

「こ、こんなぼくでよければ……。じ、実はぼくも小野瀬さんのこと……前からかわいいなって思ってた……」

「本当に!? うれしいな……」

頬を染め、上目遣いで信二を見やる御供。

その行動に触発されたか、信二はついに彼女の両肩に手を置くことに成功した。

「えっと、小野瀬さん……じゃない。ミクさん、でいいかな」

「うん……」

「ミクさん。ぼくもあなたのこと、まだよくわからない。だから、少しずつ知っていこうと思う。それでもいいかな?」

「うん! よろしくね、信二くん!」

こうして、おみくじによって導かれた2人が結ばれたのだった。

この様子を、草葉の陰から監視している者がいた。

桃代と一緒に帰ったはずの、亜莉沙だった。

彼女は移動式クレープ屋を捕まえて桃代とクレープを食べ歩き、ウィンドウショッピングを楽しんでいた。

数分前に別れ、今日の分のおみくじを引こうと小野瀬神社にやってきたばかりだった。

いつものようにおみくじを引いて『今日はどれを実現させましようかしら』と考えるつもりだった。

しかし、そこには親友の御供と、その御供を酷い目に遭わせたはずの信二が。しかも見たところ、仲直りしたところかかなり親密な仲になっているではないか。

亜莉沙は爪を噛みつつ、憤るのだった。

「むきーっ！ いったいどういふことですよー！？ ミクさんと叶がラブラブしてますわー！ ももっちゃんにタレこまないですよわー！」

2人に気づかれぬよう、さらに離れたところに移動しながら桃代に連絡を取る亜莉沙。電話の相手は、すぐに出てくれた。

「もしもしー？ セーラ、どしたのー？ あたしこれからさっきのクレープ分ランニングするつもりだったんだけど」

「そんなのどーだっていいんですの！ ミクさんと叶が……！」

「お、まさかミクの奴、仕返しとかしてんのか？ おもしろそーじやん！」

「そんなわけありませんのよー！ ミクさんの性格をお考えなさいませー！ ミクさんと叶が、ラブラブなんですのよー……！」

「な、なんだって……！！？ な、なんでそんなことに……？」

「わたくしが知りたいですよー！」

「そりゃ確かにランニングなんかどーでもいいな！ わかった、あたしもそっち行くよ！ 今どこ？」

「ミクさんのおうちの境内ですよー！ ターゲットは……きゃああ、ミクさんの頭をなでなでしていますわー……！」

ぶちっ。

「ぶちっ？ へんな音がしましたの。切られたのかしら」

電話越しに、不穏な音が聞こえた。通話を切られたのだろうか。

いや、まだ通話中だ。ではいったい……？

「ももっちゃん？ もしもしー？ ももっちゃん？ ……んも



う、切るなら切るって告げなさいませー！」

不審に思った亜莉沙は、こちらから通話を切った。

そしてその瞬間！ なにかがものすごいスピードで近づいてきた！

「ひっ……！」

亜莉沙の目に映ったものは、殺意の波導を身にまとった桃代だった。

先ほどまでどこにいたのかは知らないが、通話を切ってから10秒もかかっていないはずだ。

そして亜莉沙はここで、先ほどの不穏な音の正体に気がついた。

あの音は、桃代の堪忍袋の緒が切れた音だったのだ。

その結果、彼女はその名の通り『鬼』と化していた。

「ふしゆる〜……。セーラあ……。奴はどこだ……。」

「あ、あちらですわー！ わ、わたくしを食べてもおいしくありませんことよー！」

まさに、名は体を現すが如し。

悪鬼羅刹と化した桃代は、幸せいっぱいの2人にゆっくりと近づいていく。

「あつ、ももつち！ 聞いて聞いて！ ボクね、信二くんとお付き合いですることに……うわっ!？」

「ふしゆる〜……。かはああ……。やい、叶……。貴様、ミクに何した……。」

「だっ、誰!？」

「あたしは桃代だ……。あたしが質問してるんだ、答える……ふしゆる〜……。」

「な、何もしてない！ ぼくは、ミクさんと付き合うことになったんだ!！」

ぶちぶちっ。

桃代の怒りのボルテージが上がってゆく。

信二は知らぬ間に、火にガソリンを注いでいるのだった。

「ぼくが引いたおみくじには『手に入れたら手放してはならぬ』って書いてあって、だからぼくは手放すわけにはいかないんだ！」

「おみくじ……またおみくじ……。それがどうしたってんだ……！ 信じるのは自由だけどなあ……あたしに押し付けんじゃねえ……！

！ ふしゆる……」

威圧感たっぷりに、信二に近づく桃代。そして、こう言い放つ。

「じゃあ叶、あたしに勝ってみろ……！ そして、貴様の引いたおみくじを本当にしてみるんだな……！」

「ど、どうやって!？」

「貴様が参ったと言うまでに……あたしを一度でも殴れたりできたら……勝ちにしてやる……！ かはああ……!!!!」

気迫だけで後ずさりしてしまうほど、桃代は怒気を漲らせている。いや、これは明らか、殺意。ドMの信二は、いち早くその雰囲気気を察知した。

自分の姉の放つ気迫とは方向性が違うが、自らが危険に及ぶという点では同じ。

だが今回は、守るべきものがある。付き合うことになった、彼女が。

その人を守るため、自分に何ができるか。骨の髄までドMな彼が導いた結論は、こうだ。

「何のつもりだ……」

信二は桃代にゆっくりと近づき、背中を向けてしゃがみこむ。そして、体を丸めたではないか。ちょうど、アルマジロが体を丸めたかのように。

「どういうことだ……」

「見ての通り。気に食わなければいくらでも殴るといい。姉様にいつも酷い目に遭わされているんだ。鬼丸さんがいくら強くて、ちつとも堪えないからね」

「くっ……!」

こいつはどこまで本気なのだろうか。こんな相手は初めてだった。始めから抵抗してこない相手など、彼女の常識に存在していなかったのだ。

呆氣に取られた桃代は、殺意の波導を解除した。そして、大きく息を吐いたあと言った。

「ちつ。やい叶、今日はこのくらいにしといてやるし、ヘッドバツドの件も完全に水に流してやる。けどね、次もしミクを泣かすよ。うなことがあつたら……消すからな」

それだけ言い残し、きびすを返す桃代。御供は慌てて彼女に声をかけた。

「ももつち待つて！ ……ごめんね信二くん、今日はうれしかった。また……明日ね」

「あ、うん」

御供もまた、桃代を追いかけて行く。信二はひとり、その場に残された。

「……やった！ ついにぼくにも春が来た！ ぼくってなんて幸せ者なんだろう！」

およそ、先ほど殺されそうになった人間とは思えないセリフであった。

御供、亜莉沙、桃代の3人は、数時間ぶりに合流した。

彼女らはひとまず、御供の部屋に入るのだった。

まず最初に口を開いたのは、亜莉沙だった。

「もうびつくりですよ！ ミクさん、あなた叶とは本気なの？」

「う、うん。だってお互いのおみくじに書いてあるし……」

「待つて。おみくじおみくじってあんだねえ、そこに書かれてることガチで鵜呑みにするわけ！？」

「鵜呑みにはしてないよ。こう書かれてるからその通りになるといいなって」

「それが鵜呑みにしてるってことなんだよ！ それがなきゃなんに

もできないのか!? 恋も進路も、みんなみーんなおみくじに頼るのかよ!？」

「ももつちさん、ブレイクブレイクですわー! ミクさんが怖がってますの」

「あつ、悪い……」

桃代がやや語気を強めると、御供は頭を抱えて縮こまってしまった。

その様子を鋭敏に察知した亜莉沙が、桃代を諫める。

まったくタイプの違う3人だが妙に馬が合うのも、納得といったところだろうか。

「いい? ミク。あたしは別におみくじ引くななんて言っていないし言わないし言いたくない。でもね、それを他人に押し付けるってのはどうなんだよっての」

「……どういうこと?」

「だから……叶のやつと付き合うことになったんでしょ? でもあんたは本当に叶のことが好きなのかってのが疑問なのさ。おみくじとかそういうの抜きで。で、どうなの?」

「う……」

「即答できない、と。じゃあきつとすぐに終わるね」

「やだ……! そんなのやだ! 確かにまだよくわかんないけど、これからいっぱい知っていこうねって約束したんだもん!」

「叶のやつ、いつの間にそんな約束してたんですのー!？」

「……恋心はまだないかも知れないけど、友達として付き合うでも

……いいじゃん……。ひぐっ……」

とうとう、御供が泣き出してしまった。

その光景を見て、亜莉沙が動いた。

「ももつちさん、お謝りなさい。あなたさっき、叶に言いましたよね。『ミクを泣かしたら消す』と。ごらんなさい、ミクさん泣いてるではございませんの。泣かせたではありませんの」

「……」

桃代は、言い返せない。自分の言葉で御供を泣かせてしまったのは紛れもない事実だからだ。

「言った本人が守らないってどういうこと!? おみくじがきつかけでもいいじゃない! 新しい出会いを大切に育んでいこうとする純粋な心を踏みにじるのだけは……許さない!」

小さくすすり泣く御供を抱きながら、桃代をにらみつける亜莉沙。その表情は真剣そのものだ。

(セーラってこんなに友情に厚い子だったんだ……)

桃代は感心しつつ、一つの行動を取る。

……バシンッ!!

その時だった。桃代は、自分自身を平手打ちした。そして、御供に頭を下げる。

「ミク、セーラ、ごめん!! あたしの方がなんも見えてなかった!」

「ももっちゃん……。それでこそですわー!」

「まだミクが叶のことを恋人として見れないなら、そう見れるようにしていけばいいんじゃない。あたしらはそれに協力を惜しまない。」

「そうだよな、セーラ!」

「え、ええ……。でも、叶の方がすでにミクさんを恋人として見る可能性がありますの。それでもミクさん、叶とはお友達から始めるんですの?」

「くすん……。うん、ボクはそのつもり。信二くんの方がボクを恋人として見てくれるのなら、それはそれで嬉しいけど……!」

「でもな、ミク。男の立場から考えると、付き合ってくれて言われたらそりやお互い恋人同士だと思っちまうぜー?」

「それに関してはわたくしも同感ですの。ミクさんは叶と友達として、叶はミクさんと恋人として。このように2人の認識がズレてる可能性がありますわー!」

「うう……。そこまで深く考えてなかったよお」

「まあ、それは追々考えるときでしょう。ミクさん、今日はいろいろあつて疲れたでしょう。ももっちさん、わたくしたちはここでおいとまするべきではございませんこと？」

「そうだね。……ミク、ごめんね。あたしきつと、ミクが叶に取られるのがイヤだったんだ」

「大丈夫だよ、ももっち。ボクはずっと2人を大事な友達だと思うから。ももっちもセーラも、大好き！」

「きゃああああああ！……！ ミクさんかわいすぎますわー！！  
抱き抱きっ！」

「わっ、セーラどうしたの？ じゃーボクも抱き抱きっ！」  
「きゃー！！！！ キマシタワー！」

夜の帳が落ちたころ、叶家でも夕食が始まっていた。

最近は友達との外食が多くなった叶家長女、叶望もこの日は珍しくこの場におり、家族全員が揃うことになった。

彼女は弟である信二が大好きで、いつも虐めては楽しんでいる。

そんな望は、先ほどからやけに嬉しそうな弟を見てDSスイッチが入るのであった。

「ねーえ、ポチい。あんたずいぶん嬉しそうじゃない。何があったか、おねーさんに話してみそ？ あら、生味噌仕立てね」

これはペットに話しかけているのではない。だいいち、叶家にはペットはいない。

望は弟のことを名前で呼ばず、ポチと呼んでいるのだ。

「え、なんでわかったの？」

「わかるわよー、おねーさんなんだから。でも、どうしてそこまで嬉しそうなのかまではわからないわ。さ、話さない」

ここで逆らったところでどうせいいことがないので、信二はさらっと言つてのけた。

「えっとね……ぼく、告白されたんだ」

「ぶっ!？」

味噌汁のお椀を両手で美しく持ちながら飲んでいた望だが、弟の言葉により口に含んでいたものを霧状に噴出した。

こういう時、両親というのはのんきなものだ。「明日は赤飯か」「ケーキも買いましょう」などと言い出す始末。

この両親の性格を色濃く受け継いだ信二もまた、告白されたときの光景を思い出してにやけ顔になるのだった。

どうにも面白くない望は、信二の耳を乱暴に引っ張りながらその耳元に囁く。

「ごはん終わったらアタシの部屋に来なさい。わかったわね」

夕食後、言われるがままに姉の部屋を訪れる信二。

数度のノックの後に入室すると……長い脚を組みながら椅子に座る望がいた。

一言で表現するならば、妖艶。世の男性の9割方はその姿に魅了されるであろう。

「いらっしやあい、ポチ。まずは、アタシの足をお舐めなさい」

「またなの姉様……。で、どっち？」

この姿に魅了されない1割のほうの人間である信二は『また始まった』という表情で尋ねる。

傍から見ればあまりに異様な光景だが、この姉弟からすれば恒例行事なのである。

「どっちでもいいわよう。ほら、早くう」

「はいはい……」

信二はためらうこともなく、姉の前に跪く。そして……自らの舌を、目の前の足に触れさせる。

「あ……はあ……んっ。そうよ、上手になったじゃなあい……」

「姉様、変な声出さないでよ。聞こえちゃうでしょ？」

「汚あい……。ポチ、あんた自分でなにしているかわかってんの……やっ……!」

「わかってるよそのくらい。姉様に言われて、姉様の足を舐めてるのよ」

嫌な顔ひとつせず、姉の足に舌を這わせる弟。

しつこいようだが、この行為はこの2人にとっては恒例行事である。

「ひう……んくっ……あん……っ」

「姉様、もう片方は？」

「らめえ……やめないでえ……」

快楽に溺れ、懇願する望。恍惚の表情はそのまま、彼女の感情を表している。

もつとも、その表情を見ている者は誰一人としていないのだが。

「い……ふあ……あああ……ん……！」

「姉様、だんだん弱くなってない？ もうやめた方がいいんじゃないの？」

この行為を5分ほど続けたころ、信二が舌の動きを止めた。

望の声が少しずつ弱くなってきたため、心配になったのだ。

だがこれが、彼女の興を削ぐことになってしまった。

「……なに勝手にやめてんの、よっ！」

ガスッ！！

舐められていない方の足で、かかと落としを決める望。

理不尽な暴力を受けた信二は少し涙目になりながら、望の顔を見る。

「痛いなあもう……。次はなにをすればいいの？」

「これ以上なにかしたいの？ あんた、DMのレベル上がってない？」

「そりゃ姉様に毎日のように虐められてるんだから、少しは上がるよ」

「そういう問題じゃないでしょーに……。まあいいわ。ポチ、あんたさっき告白されたって言ったわよね。そのこと、詳しく話さない」



「詳しく？ いや、詳しくもなにもそれ以上のことは……」

「そーじゃなくて！ 相手のこと言えつつつてんの！ 名前とか、どんな子なのか」

「あー、そういうこと。同じクラスの小野瀬御供って子で、近くにある小野瀬神社の子なんだよ」

「へー、そうなんだ。って、巫女さんじゃん！ なにアンタ、まさか巫女萌えだったわけ」

「そ、そんなんじゃないって……。なんだろ、素直でかわいくて……」

「それにしても、よく告られたわね。ね、その子になにかしたの？」

この辺りの会話を聞いていると、普通に仲の良い姉弟のそれに聞こえてくるから不思議だ。

実際、望はこの時は信二に対して何もしておらず、わりと真剣に話に耳を傾けていたのだ。

「思いつかないなあ……。あ、今日その神社でおみくじ引いて、大吉だったんだ」

「すごいじゃん。でも、それがどうかしたの？」

「姉様は知らない？ 小野瀬神社のおみくじって必ず当たるんだって」

「……は。そんな話聞いたこともないわ。根拠は？ なに、そのミクちゃんと言ってたから？」

「うん、まあ……。うちのクラスの女子の周りでもちよつとした噂になってるし」

「いいわねそれ。今度そこを撮影の場所にするわ」

「撮影って？」

「アタシの先輩がさあ、けっこー名の知れてるコスプレイヤーでね。新規撮影スポットとして神社みたいなところを探してたのよ」

「いいじゃん。だったらばくの方から相談してみるよ。多分大丈夫だと思うけどね」

「ありがと、ポチ。……話がそれたわ。その必ず当たるおみくじってまだ持つてる？」

「うん、持つてるよ。見る?」

姉の返事を聞く前に、すでにおみくじを差し出していた信一。  
望はそれを受け取り、目を通した。

「確かに大吉だね。でもなんの変哲もないおみくじじゃない」

「えっと、そのおみくじは大吉とかそれが重要じゃなくて……仕事運とか金運とかあるでしょう、そこに書かれてる内容のどれかが必ず本当になるんだって」

「なるほどねえ。で、アンタはどれが当たったわけ? ……あ、恋愛か」

「そうそう」

「『手に入れたら手放してはならぬ』……ねえ。これ、当たったってどうやって判断するの?」

「そう言われるとわかんないな……。強いて言えば、ミクさんが言ってたからかなあ」

「まあ、神社の子が言うなら信じちゃうよね。おみくじも占いも結局そんなもんよ。自分で当たってるって思えばそれでいいわけだし。結局てめえでしか判断できないんだから」

「うん。だからぼくはこのおみくじの結果を信じて、彼女を手放さない。だってミクさん、すげーかわいいんだもん。手放せって言われたって無理だね!」

「けけえー! いっちょ前な口叩きやがって! ……じゃあアタシ、今度友達と先輩連れてその子に会ってくるわ」

「それはいいけど……泣かさないでよ?」

「まさかあ。将来の妹になるかも知れない子をどーしていぢめなきやなんないの?」

「……ぼくはいぢめるくせに」

「なんか言ったー? まあいいわ。ねえポチ、今夜はおねーちゃんと一緒に寝ない?」

「……どうせぼくに拒否権はないんでしょ? いいよ、付き合っよ……」

「あんもつ、素直でかわいいんだからあ！」

達観したドMという存在は、ここまで神々しいのだろうか。どんなに理不尽でも文句を言わず、どんな無理難題でもホイホイとついていくではないか。

この日の夜更け、彼が体を丸めて眠りについたのは言うまでもないだろう。

日付が変わり、午前9時。夏休みの長い大学生の望はようやくの起床だ。

寝ている間にはだけたか、はたまた獣と化した弟にひんむかれたか定かではない寝巻きを着なおしてから、携帯電話を手に取った。

「えーっと、美月先輩と……。お、出た出た」

「おはよう、ノゾミさん。どうしたのかしら、こんな朝早くに」

「早いつつてももう9時でしょ？ 美月先輩、寝てたー？」

先輩と呼ぶわりには軽い態度で対応している相手は、望の通う大学の先輩である、柏木美月。

『氷上セツカ』という別名を持ち、コスプレ界ではそれなりに名が通っている女性のようなのだ。

そんな彼女は、かなり生活リズムが崩れている。この日も寝たのが午前5時をまわった頃で、本来ならばまだ寝ている時間だった。

この事実を彼女のファンが知ったら、失望するだろうか。はたまた親近感を持ち、さらに推すようになるだろうか。

『ええ、寝ていたわ。夕べはハピ動でホラーゲーム実況プレイ動画をずっと見ていて、気がついたら外が明るくなっていたのだけ。ふわあ……』

「そりゃ眠いわー。でも今日はいいい報せがあるんだー」

『なにかしら』

「美月先輩さ、和風な撮影場所探してるって言ってたよね。そういうところが見つかったんだよ」

『それは確かに朗報ね。なんていう場所かしら』

「アタシの地元なんだけど、小野瀬神社ってとこ。今度案内するね」  
『お願いするわ。……ふわぁ、眠い。申し訳ないけれど、もう一眠りさせてくれないかしら。今日のサークルも……重役出勤なのだから……』

「お、おやすみ……」

電話の相手は、本当に眠そうだった。望の方から通話を切ったが、そうしないといつまで経っても通話が続いていたことだろう。

まだ夏休み中とは言え、あまりにも怠惰が過ぎるのではなかろうか。

「ん……。アタシももう一眠りしようかな……。でも今日はサークルあるんだよなあ……」

眠い目をこすりながらも、望はなんとか体を起こす。

そして、本棚から適当に数冊掴み取り、かばんに入れる。

「でも行かなきゃな。借りたもん返さなきゃいけないし……よっし！ 朝風呂してスッキリしよう！」

さらに入浴の準備を整え、風呂場へと向かうのだった。

## 第2章：大凶 ただより高いものはなし

ところ変わって、常関学園高等部。

間もなく2時間目の授業が始まる頃だった。

次の時間は教室移動があるため、教室内がにわかに活気付いている。

「ミクさん、そろそろ行きましょうよ」

「ちよつと待っててセーラ、信二くん呼んでくるから」

「しょーがないな。あたしらもついてくか」

そんな中、我らが御供は昨日告白した相手である信二に声をかけていた。

後ろには御供の親友2人もいつしよだ。

「信二くん、一緒に行こ？」

「ミクさん。ああ、もちろん。ちよつと待っててね、準備しちゃうから」

信二がやっていたゲームの手を止め、いそいそと準備を始めた。

そこに恨めしそうな声が飛んできた。信二の数少ない友人、手塚廉太郎だ。

「ちえつ。いいよなーお前ばっかり」

「なんだよレン、うらやましいの？」

「ああそつだよ！ なあ鬼丸に瀬良、お前らどつちかオレと一緒に行かね？」

「なつ、なんなんですよー手塚！？ あなた一体、何様のつもりですのー！？」

「うーん……。いつもだったら『調子こいてんじゃねーぞゴラァ』的なこと言ってたけど、今はミクと叶があれだしな。お前も叶を取られてさびしいんだろ」

桃代の指摘に、廉太郎は目線をそらして答える。

「そつ、そんなんじゃねーよ。オレは、信二をジャマしたくねーだ

「けだよ」

「強がんなって。お前もあたしらの友達として認めてやるからさ。ね？」

「えっ……？」

「ちよ、ももっちゃん！ あなた気は確かですのー！？」

「セーラこそ大丈夫かよ。別に友達になるくらいいいじゃん。なあ手塚？」

「お、おう……。瀬良、お前そんなだから友達できないしみんなからバカジョ呼ばわり……。はっ！！」

「よお、手塚……。今回はあたしに向けて言ったわけじゃないし、友達になつたって事で見逃すけど……。次はないからな」

「むきー！ わたくしがこんな奴にデイスられるなんて一生の恥ですわー！ 蹴るっ蹴っちゃる、えいえい！」

周囲が騒がしいと思い、そちらを向く御供と信二。

そこには、亜莉沙が廉太郎を攻撃している光景があった。

2人は互いの顔を見て、苦笑するのだった。

「はは、レンの奴すっかりあの2人と仲良くなつたみたいだね」

「レンって手塚くんのことだよ。ボクもそう呼んでいいのかなあ」  
そのレンこと廉太郎は、亜莉沙に腿の部分を蹴られて躓いていたが、その際に彼女の足を間近で見えることに成功した。

この時、彼に電流走る……！

(こいつ……なんていい脚してやがんだ！)

廉太郎は鼻息荒く立ち上がり、亜莉沙の正面に回って言った。

「瀬良、お前明日からニーソはいてこい。ニーソ歴3年のオレが言うんだ、間違いなくお前にはニーソが似合う！」

「は、はあ〜？ お前はいつたい何を言い出すんですのー！？」

「手塚、お前見どころあるな！ いや、あたしも前から思ってたんだよ。セーラほどニーソが似合いそうな女の子はなかなかいないつてさ」

「ももっちゃんまでどうしたんですのー！？ ……じゃあ手塚、そ

れなら言い出しっぺのお前が買うのですわ！ それなら考えてあげてもよかったですよ」

「マジでか！？ 来たー！ー！！ これでもた『神聖ニース帝国』に一步近づいたっ！！ じゃあ放課後、買いに行くぞ」

「……しっ、仕方ありませんわー！ 手塚がどー！ー！ーしてもと言っなら、付き合ってあげても構いませんことよー！」

「はは、こっちはこっちで何のフラグが成立するんだか」

たった一人取り残された感のある桃代がその言葉をつぶやく頃には、もうすでに2時間目が始まっていた。

彼ら5人、見事に遅刻である。

そして昼休み。この日から御供たちバカージョは信二と廉太郎を交えて昼食を食べることになった。

高校1年次で男女混合グループができるのはかなり珍しく、当然この1・C内では初めてのケースだった。

「いやー、にぎやかになったもんだね」

こう言うのは桃代だ。他のみんなと比べてやや大きめの弁当箱を取り出しながら言うのだった。

「にぎやかな方が楽しいよね。ボクうれしい……」

「うひー！ ミクちゃんかわいいなーおい！ セーラ、お前もちっとは見習えー！」

「……今、なんて言いましたの！？ まさか、手塚の分際でこのわたくしをセーラ呼ばわりしたんですのー！？ むっきー！！！！」

絶対に許せませんわー！！」

「あっはは、瀬良さんとレンはもうすっかり仲良くなったみたいだね」

「まあ、あーやってじゃれあってられる内が花だよな」

このように特にギクシャクすることもなく、楽しく昼休みが過ぎていくはずだった。

御供が信二に、新たな告白をするまでは。

「……えつと、ちょっといいかな。信二くん」

「なにかな、ミクさん」

信二は、やや思いつめた様子の御供を見て一抹の不安を覚えた。

「あのね、昨日ボク信二くんに告白したじゃない。でもあれ……恋人としてじゃなく、友達としてってことだったの……」

「えっ」

その告白で、楽しかった空気は一瞬のうちに凍りつく。

信二はというと、明らかにシヨックを受けているようだった。

空気が重い。他のクラスメイトも、ここの空気の重さを感じ取ったようだ。

この空気を言葉で打ち砕いたのは、廉太郎だ。

「いや……ミクちゃん、そりゃないわ。信二のこと考えたらちよつときついよ」

「ごめんね、信二くん。ボク、よく考えたら信二くんのことあんまり知らないから、それなのに恋人になってつても失礼だと思って……」

「そ、そうですね。叶、ミクさんはお前ともつといいお付き合いをするために言っているのですわ。聞き入れなさいませー！」

「わりーな、叶。だけどセーラの言う通りなんだよ。ミクも反省してるし、あたしも謝るからさ……」

事態を飲み込みきれない信二は、しばし放心する。

しかしそれでも、毅然と言い放つ。

「そ、そうだ……ね。ぼ、ぼくもミクさんのことよく知らないし……だ、だから友達から始めようって……ことですよ」

「うん。ごめんね、ボクのがままで……」

「いいんだよ。どうせぼくみたいなのがいつちよまえに恋をしようなんてのが、そもそもの間違いだったってことなんだから」

だがやはり、シヨックは隠しきれないようだった。

口について出た自虐的とも取れる発言が、桃代の逆鱗に触れたようだ。



「てめえ叶、なんだよその態度！ ミクはそんなお前と仲良くなり  
たいって言うてんだろ！？ 男らしくねーな！」

「女の子である鬼丸さんには言われたくないな。所詮、男つてのは  
いつでも女性の言いなりなんだよ。だからはいはいって言うて従っ  
てればいいの。それが、男らしさじゃないのかな」

「……！」

しかし、信二には届かない。物心つく前から、姉の肉体言語によ  
る教育的指導を受けてきた彼は、すでに独自の哲学を持ってしまっ  
ていたのだ。

そんな彼には、それと同レベルの修羅場を潜り抜けていないであ  
ろう人間の忠告など耳に入るはずもない。

桃代が論破され、放心する中……御供が不意に席を立ち、教室を  
飛び出した。

「ミクさん！？ どちらに行くんですの！？」

「くそっ！ お前らはそこにいろ！ オレが行って連れ戻してくる  
！」

「手塚！ ……頼みましたわ！ わたくしたちは叶と少しお話しし  
なければなりませんの！」

一時の勢いで教室を飛び出した御供だが、間もなく廉太郎に腕を  
掴まれる。

「レンくん……。どうして？」

「どうしても何も、ほっとけるわけねーだろ。ともかく、中庭出よ  
うよ」

常関学園には、体育の授業を行うグラウンドとは別に『中庭』と  
呼ばれる場所が存在する。

吹奏楽部や演劇部など一部の部活動の練習場に使われたり、昼休  
みには食事を取る場所として使われることもある多目的スペースだ。  
そのため、どの時間帯に訪れても人がいるイメージがある。屋上  
に入れないため、仕方なくここを使うしかない……という気もしな

いでもないが。

廉太郎は御供を近くのベンチに座らせ、自分もその隣に座る。

「どう、落ち着いた？」

「う、うん……。ごめんね、急にどっか行っちゃって……」

「もしかして、信二を軽蔑した？」

「ううん、そんなことない！ でも……驚いたのはホントだよ。信二くんがあんな考え持ってたなんて……」

「あー、それはあいつのお姉さんのせいだ。信二、ずっとお姉さんにいじめられててさ。いじめられてるっつーと語弊があるけど……それに近いことはされてんだよ」

叶姉弟がどう思おうと、客観的に見ると姉の望が弟の信二をいじめて楽しんでいる事は確定的に明らかなのだ。

被害者であるはずの信二がむしろその状況を楽しんでいる節があるため、誰も止められないのだが。

「それがあるから、信二は『女はみんなああで、男はみんな女の言いなりになるべきだ』って言って譲らないんだよ。だから、ミクちゃんが悪いつてわけじゃない」

「ボク違うもん……。言いなりになれなんて思ってない……」

「わかってるけど、あいつの考えはそうなんだ。あいつのことを知っていききたいのなら、そこを理解してあげなきゃいけない」

「でも……そんなのかわいそうだよ！ それじゃあ信二くんは、これから知り合う女の人にいじめられるって思いながらずっと生きてくの！？ 変えてあげたいよ……」

「……そうなると、あいつのお姉さんを説得することになる。あいつはシスコンでもあるから、お姉さんにはどんなに酷いことをされても文句言わないんだ……」

廉太郎から信二の話聞くことに、御供のシヨックは深くなっただけ。

女性に対し、あまりにも歪んだ印象を持つ相手を好きになっちゃった。

自分も同じように思われているという事実の一つショックを受け、彼の抱く負の面を改善するためにはあまりにも大きな壁があるという事実にもまた一つショックを受ける。

廉太郎はそんな御供があまりにも不憫だと思い、彼自身の思いを告げる。

「だけど、オレもそれは間違ってると思う。だから、変えてやりたいんだ。ミクちゃんのためにも、何より信二本人のためにもな」

「……うん。ボクもがんばるし、ももっちゃんやセーラもきつと協力してくれる。だから、レンくんもお願い！」

「おうよ！ 任せときな！」

得意気に胸を叩く廉太郎。しかし、少し強く殴りすぎてしまったようだ。

少し咳き込みつつ、全く別の話題を振る。

「ぐはっ……。あ、そうそう。話は変わるんだけど……セーラのこと、ちつと教えて？」

そのころ教室内では、信二が亜莉沙に詰め寄られていた。

桃代は未だに放心状態で埒が明かないため、亜莉沙が一人でやるしかなかったのだ。

「やい叶、さつきはよくもミクさんに酷いことをおっしやいましたわね。お前にミクさんを渡したくないって思う理由が分かりましたわ、ミクさんの気持ち全然わかってらっしやらないから！」

「気持ち、理解できてないかなあ。今のミクさんは、ぼくと仲良くなりたいうわけであって、それについてはぼくも同感だからOKを出した。これ、気持ち分かってない？」

「そういうことを言っているではありませんわー！！ 言われたことにはいそうですかと従うだけでいいのかと言っているんですよー！！」

「はあ……。だから女って苦手だよ。言いたいことが一貫してないんだもん。結局ぼくはどうすればいいんだって話だよ。姉様だって

すぐ手のひら返すし……昨日だって……ぶつぶつ」

「くっ……。ももっちゃん！ さつきからだんまりで、どうしたんですのー……。？ も、ももっちゃん……。？」

信二を攻めあぐねている亜莉沙は、たまらず桃代に援軍を頼んだ……が、その桃代は大粒の涙をとめどなく流しているではないか。

（こいつは……。とてもかわいそうな奴だ。こいつは……。異性をしっかり見ることができない。これじゃ……。ミクもこいつもかわいそうすぎるよ……。！）

「ももっちゃん？ どうなさいましたの？ ど、どうして泣いているんですのー！？ あうう……。？」

「ひぐっ……。これが泣かずに……。いられるかっての！ ミクもこいつも、かわいすぎるよ……！ えぐっ……。ぐすっ……。？」

「や、やめてくださいまし……。！ わたくし、そんな弱っちいももっちゃんなんか見たくありませんわ……。？」

亜莉沙は、桃代を抱きしめることしか出来なかった。そしてそのうちに、自分も悲しくなってくる。

信二を攻めあぐねているからではない。桃代が泣いているからではない。親友が悲しんでいるのに、その理由がわからない自分がふがいなくなっただからだ。

声を殺し、静かに号泣する亜莉沙。桃代の左肩が、彼女の涙で濡れそぼる。

「鬼丸さん、どういうこと？ ミクさんがかわいそうだったのは分かるよ。こんなぼくのことを好きになっただばかりに、あんな思いをさせてしまったし……。でも、なんでぼくまで？」

「いいか叶、お前は……。とんでもない誤解をしてる！ 男を言いなりにするのが女！？ そんなのダメだよ、全然なっちゃんないよ……」

「……くすん」

「お前がどうしてそんな考え方になったかは知らないし知りたくない。でも、それは間違ってたんだ！ だからその考え方を、あたしが

叩きなおしてやる！」

「えっ……？ それはどういうこと……？」

「お前がそういう考え方だから、ミクが今いないしあたしもセーラも泣くことになったんだよ。見てみる、セーラがこんなに泣くなんて今までなかったんだからな」

桃代は亜莉沙を、逆に抱き返す。今度は桃代の胸を、亜莉沙の涙で濡らすことになった。

「だから叩きなおすんだ。そして、ミクとお前が楽しく過ごせるようにしてやるって言ってた。……お前が望まないなら、それでもいいけどな」

「仮にぼくがそれを拒否したら、どうなるのかな」

「その時はその時だ。きつとミクは傷つくだろうね。そうになったら、あたしはお前に何するかわからないよ」

「……ぼくは別に鬼丸さんに何されようが堪えないだろうけど、それでミクさんが傷つくのはイヤだな」

「決まりだね」

信二の意思など聞き入れるつもりもないだろうが、ともかく彼の異性に対する考え方を改めさせようと桃代が決意したころ、廉太郎と御供が戻ってくる。

「手塚！ それにミク……。手塚、よくやったな！ そして、ミク……。気持ちの整理はついた？」

「うん。レンくんとも話したけど……ボク、信二くんがちゃんと女の子を見てくれるようにがんばる！」

「そういうことだ。信二、オレからも頼むよ。ゆっくりでいいから、変わってこうぜ」

戻ってきた2人も、信二を説得する。

「……ぼくも、そのつもり。鬼丸さんが協力してくれるみたいだから、どう変わればいいのかわからないけど、頑張ってみる」

その時、ついに本人の口から宣言を聞くことが出来たのだ。

「よっし！ よく言った……って、鬼丸。なんでセーラ抱いてんの

？ そんな、むぎゅって」

「へっ！？ こっこれは、泣いちゃったセーラがかわいかったから……じゃなくて！」

「いや待て。セーラ泣いてんの？ なんでよ」

「……叶が悪いんだよ。よっぽど悔しかったんだなー。おーよしよし」

「はあ！？ おい信二！ せっかく見つけたダイヤの原石になんてことすんだ！」

「なんだよそれ、知らないよ！ レンが勝手にそう思ってるだけじゃないか！ それに、レンが気にしてるのは脚だけだろ！」

信二と廉太郎はすっかり普段通りだが、亜莉沙は未だに泣き止まない。

「ねーももっち、セーラホントにどうしたの？」

「叶に言われたことがよっぽどショックだったんだろつよ。ま、ここはあたしに任せときな。……はあはあ」

「……ももっちはなんでそんなに呼吸が荒いの？」

「いつもタカビーな子がたまに見せる弱い面……それをあたしだけにさらけ出し……ふへ、ふへへ……」

「うう……。信二くん、レンくん……」

「百合、だな」

「百合、だね」

男2人は同じタイミングで、同じ言葉をつぶやいた。

放課後、亜莉沙と廉太郎は2人だけで近くのショッピングモールに出かけていた。

亜莉沙は昼休みにひとしきり泣いたせいもあってか、若干おとなしかった。

そのため廉太郎は、持つ必要のない緊張感を持ちながら歩いていた。

「な、なあセーラ？」

「なんですの」

「お前さ、好きな色とかある？」

「……黒と、紫」

(かーっ、どうにもやりにくいなあ)

廉太郎はたまらず、亜莉沙に詰め寄る。

「セーラ！ いったい何があつたんだよ！？」

「……お前なんか話しても仕方ありませんわ」

「こいつ……！ 言ってくれなきゃわかんねーだろ！？ そんな沈んだままでついてこられても、こっちのテンションが下がるだろうが！」

「お前の都合など知ったこっちゃないですわ」

(うつぜえ~~~~！！ で、でもここでキレたら『神聖ニーソ帝国』の夢が……！ ここはオレが寛大にならなきゃ……！)

堪忍袋の緒が切れそうになったのを寸前で食い止めた廉太郎は、ため息交じりで漏らす。

「はあ……わかったよ。これ以上は聞かないよ。んなことより、着いたぞ」

最近のショッピングモールでは、靴下のみを扱う店舗もはや珍しくない。

彼らが今回見つけた店は小さめのカバンやペンケースなども取り扱っていたものの、中心は靴下であった。

「……」

落ち込み気味だった亜莉沙も、店内のカラフルさに少しずつ普段の調子を取り戻していく。

少なくとも、このような言葉を吐ける程度までは。

「な、なかなかよさげなお店ですわー。やい手塚、こうなったらこの店で一番高いものを買わせてさしあげますわ！」

「お、いいぞセーラ。やっぱお前はそうでなくっちゃな」

2人は店内に入り、適当に物色する。

当然のことながら、男性客は廉太郎しかいない。

「すぐ……！ ここにはまさに、オレの理想が詰まっている！」

「うっさいですわ」

「お、この辺に紫に近い色があるぞ」

「どれですの」

傍目から見れば、どこにでもいる初々しいカップルである。

そんな様子を温かな目で見守っていた店員が、2人に声をかけてきた。

「いらっしやいませっ！ 本日はどういったものをお探しですか！  
？」

「うわっ！？」

店員の声はあまりにも大きく、廉太郎は亜莉沙ともども狼狽してしまっ。

「え、えっと、ニーソックスなんですけど……。黒と紫のボーダー柄ってあります？」

「あー、ございますよ！ さあ！ こちらへどうぞー！」

その店員（どうやら『雛形』という名前らしい）はよく通る声をさらに張り上げ、2人を案内する。

「うわあ……！」

思わず亜莉沙が感嘆の声を上げたその場所には、さまざまな色や模様のニーソックスが所狭しと飾られていた。

最近はこのを着る女性が増えてきたため、売り場を拡張したとのことだ。

彼らを案内した店員もまた、ニーソックスを着用していた。

「こんなにたくさん種類あったのか……。よしセーラ、探すぞ！」

「……はっ！ つい見とれてしまいましたわー！ うーんと……。あつ、これですわー！」

数あるニーソックスの中から亜莉沙が選び出したものは……。やはり黒と紫のボーダー柄のものだった。

「それでいいのか？ 確かにお前の好きな色だと思うけど、もっと派手なのあるじゃねーか」



「うるさいですわ！ わたくしがいいと言ってるのですから従いなさいませー！」

「うっせーのはお前だ！ それでいいなら金払ってくるから、よこせ」

廉太郎は亜莉沙の選んだ物を受け取り、レジへ持っていく。

「お会計、3150円ですー！」

「えっ」

買い物を終えた2人は、亜莉沙のたつての希望により小野瀬神社に向かっていた。

「それ、絶対明日はいてこいよ、わかつたな!?」

「言われなくてもそのつもりですわー！ で、スカート丈はどうしますの」

「そうだなあ……。領域が10cm程度見えるくらいかな。まあ、それは明日でもいいや」

「わかりましたわ。……手塚、そういえばお前は どうしてこんなにニーソにこだわるのですの」

亜莉沙は、朝から引つかかっていた素朴な疑問を初めてぶつけた。「オレな、いとこがいてさ。その人の彼女がすげーニーソ似合ってる！ だからオレもそんな彼女が欲しくてさあ」

「……ぞぞぞ、このわたくしを彼女にするつもりじゃないですわよね!? そ、そんなの天地がひっくり返っても、太陽が西から昇ってもゴメンですわー!!」

「あつたり前だ！ だーれがお前みたいなバカージョと！ でも、ニーソが似合うってのは本当だからな」

「えっ……。ほ、ほめ言葉として受け取っておきますわ！ せいぜいわたくしの美脚に見とれなさいませー！」

話をしながらだと早いもので、彼らは小野瀬神社に到着していた。「着きましたわ！ さあ、おみくじを引きますわー!!」

「へー、ここがミクちゃんの家の神社なんだ。初めて来たなあ。オ

レもおみくじやってくか、せっかくだから」  
亜莉沙はすでおみくじを手にしており、今まさにそれが開かれようとしていた。

## 大凶

総合運：安全な場所などないと心得よ  
仕事運：後回しにすると倍返しを食らう  
恋愛運：相手を立てるべし  
健康運：体より心を大事にせよ  
金運：ただより高いものはなし  
捜し物：一つ見つけては二つなくす  
勝負運：逃げるが勝ち

「……むきー！　今まで見たこともないほど悪い結果ですわー！  
やい手塚、これもお前のせいですわ！　えいえい」  
まさかの大凶を引き当ててしまった亜莉沙は、その腹いせとして廉太郎に容赦ない攻撃を加える。  
蹴られながらも、彼は自分の引いたおみくじを開く。

## 小吉

総合運：慢心は身を滅ぼす  
仕事運：実力以上の力が発揮できる  
恋愛運：小さな芽は確実に育っている  
健康運：他の者にも注意を払うべし  
金運：先行投資が大きな結果を生む  
捜し物：一度探した場所を再度探すべし  
勝負運：一か八かを恐れるな

「おおっ！　見てみるよ、オレ小吉だってよ！」  
「おーっほっほ！　なんとという微妙な結果なのでしょう！　しよせ

んは手塚ですわー！」

「お前は大凶だったくせに」

「うっさいですわ！　ここのおみくじは大吉だとか大凶だとかではなく、それ以外のところが重要なんですのよー！」

「でもよ、大吉ならこの総合運とかに書かれてることもいいことだろ？　関係ないわけじゃないと思うぜー」

「御託はどーでもいーんですの！　それより、わたくしはもう帰りたいですわ」

「そだな。んじゃあここで解散だ。さっき買ったニーソ、ちゃんと明日はいてこいよ！？」

「も、もちろんですわ。せっかく買ってもらったんですもの、その好意を踏みにじるようなことはしませんわ。……い、いちおうお友達、なのですから」

最後は持っていたカバンで顔を隠してしまったため、ほとんど聞き取れなかった。

「あ？　なんだって？」

ここで廉太郎が聞き返してしまったので、亜莉沙は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして叫んだ。

「むつき~~~~！！！！　先に帰らせてもらいますわー！！」

「あっ、おいセーラ！　……ま、いいや。明日はデジカメ持っているかないとな！！」

翌朝、亜莉沙は足早に校舎内に駆け込んだ。

周囲の視線が、いつもより痛いのは気のせいであろうか。

（なんなんですかー？　どうも今日は誰かに見られている気がしますの）

もちろん実際にいつも以上に注目を集めているという事実は、存在していない。

ただ、初めてニーソックスをはいたものだから余計に視線が気になっただけだった。

それを『いつもより注目されている』と解釈しているのだから、つくづくおめでたい性格である。

「おはようございますのー！」

「お、セーラか。今日は早いね」

教室の扉を開け、普段はまず行わない朝の挨拶などをしてみた亜莉沙。

しかしその声に反応してくれたのは、桃代しかいなかった。

「あら、ももっちゃんしか来てませんか？」

「そーだね。ミクも叶も、手塚も来てないな」

「まったくしよーがないですわー！ セーっかくわたくしが恥を忍んでニーソをはいてきたと言つのに」

「え？ ……うわぁ！ ニーソだ！ ちょ、セーラ！ これどうしたの！？」

「どうしたもこうしたも、昨日手塚の奴が買ってくれたんですわ」

「手塚……グッジョブ！ ジュースでもおごってやるのかな……はあはあ」

「ももっちゃんっ！？ 呼吸が荒いですわー！？」

「気のせいだろ。そんなことよりセーラ。それ、領域狭くね？」

「は？ 領域つてなんのことですの」

「ニーソと、スカートの中の露出部のこと！ それが狭いんじゃないのかって言うてんの」

「そ、そんなことありませんわー！ これ以上スカート上げたら…

…ぱ、ぱんつ見えちゃう……」

「じゃあ脱げ」

「ひぎい！ こ、この人今さらつともものすごいこと言いましたわー

！…とても女同士の会話とは思えませんわー！…」

「だって、あたしはいてねーよ？ ほれ」

その時！ 桃代は自らのスカートを捲り上げるといふ神をも恐れぬ偉業を成し遂げた！

「ももつちさん!!! らめえええええええええ!!!」

亜莉沙は自らが出せる最大の声を張り上げ、彼女の行為を食い止めようとしたが……ダメっ……!!!

ついに痴女、いや桃代の生まれたままの下半身が白日の下に晒されてしまうのかッ!?

男子生徒もまばらながらに存在する教室内で、本当に大丈夫なのかッ!?

……しかし、そこに存在したものは、短パンをはいた桃代であった。

「なーんだ……そういう意味でしたの……」

「そーゆーこと。これなら別に見られたって関係ないもんな」

「確かにそうですけども、何か女として大切なものを地平線の彼方に投げ捨ててる気がしますの」

「その通りだあああああ!!!」

「!?!」

その時、扉の外から心の叫びが聞こえてきた。

直後に、廉太郎がブリッジのポーズのまま器用に亜莉沙と桃代に近づいてくるではないか。

「手塚!?! お前なんてカッコしてんだよ!?!」

「お、鬼丸……!! お前、そのスカートの中!」

「スカートの中がなんだって? 見たいなら見してやるよ、ほれ」

「そ……そんな希望だけを除去されたパンドラの箱なんか見たくもねーよ!」

ブリッジの姿勢を崩し、普通に地に足をつける廉太郎。

桃代はいまだに自らのスカートを捲り上げた体勢を保っていた。彼女に羞恥心という概念は存在するのであるのか。

「じゃセーラの見たいのか? 頼んでみりゃいいじゃん」

「ぶっ!?! なんてこと言い出すんですのー!?!」

「そうでもない! オレは! ニーソをはいた女の子が見たいだけなんだああああ!!!」

廉太郎は、声高に宣言した。教室には20人くらいが来ていたが、その全員がこちらに注目している。

「あれー？ 瀬良ちゃん、長い靴下はいてるー」

「ホントだホントだ！ かわいいー！」

「ねーねー！ それどこ買ったのー？」

「……ふへ？ み、みなさん？ どうされましたの？」

クラスメイトはここに来て、普段と違う格好をしている亜莉沙に気がついた。

彼女は容姿以外の面に問題があるためあまり人気がなかったが、その容姿がさらに目を引くものになると注目せざるを得ないのだろうか。

注目を浴びることに慣れていない亜莉沙は、戸惑うことしか出来なかった。

「ここでようやく『いつも以上に注目を集めている』という事実が生まれたのだ。

この状況を作り上げた廉太郎は得意気に言う。

「どーだ、オレの言った通りだろ！？ セーラにはニーソが似合うって！ 3000円も出した甲斐があつたぜ」

「3000円！？ ニーソって高いんだな！」

「……だけど、まだ領域が狭いな」

「あ、お前もそう思う？ あたし言ってやったんだよ、狭いんじゃないのかって」

「それで？」

「これ以上スカート上げたらぱんつ見えちゃうとか言うからさあ、じゃあ脱げって言ってやったのよ」

「いや、脱げばいいってもんじゃないだろ……。スカート上げるのがダメなら、ニーソを少し下げるだけでもいいのにな」

「手塚、お前は領域どんくらいあるのがいい？」

「10cmだな。プラマイ1cmが誤差の範囲内で」

「あたしもそんな感じかな。広すぎたらニーソはく意味ないし、狭

すぎたらストッキングにしろって感じだし」

「よし、そういうことなら2人で言いくるめるぞ！」

「よっしゃ、乗った！」

奇妙な縁で結ばれた廉太郎と桃代は、未だにクラスメイトに囲まれて戸惑っている亜莉沙に詰め寄った。

「おいセーラ！　ちゃんとはいてきたのはいいが……領域が狭すぎんだよ！」

「んなつ！？　手塚までももっちさんと同じこと言うんですの！？　まま、まさかぱんつ脱げまで言いませんよね！？」

「何言つてんだお前？　いいからニーソをもう少し下げるか、スカートをたくし上げるかしゃがれつてんだ！」

「そーだそーだ！　みんな期待してるぞー！」

「うう……。こっ、こんな辱めを受けたのは初めてですわー！  
……」

亜莉沙は恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にしてしまった。  
しかしながら、その状態でゆっくりとスカートをたくし上げるのであった。

ニーソを下げるという選択肢も用意されていたのにも関わらず、何故リスクが高いほうを選んだのだろうか。

「ほっ、ほら！　こ、これでよろしくて！？」

羞恥心を克服した亜莉沙は、露わになった10cm強の太ももを誇示した。

これには桃代も廉太郎も、刮目するしかなかった。

「ふ……ふふ……。やはりオレの目に狂いはなかった！　セーラ、お前はニーソをはくために生まれてきたとしか思えねー！」

「そうだよ！　見てみるよこの領域を！　自分ですごいなんて思わない？」

「う……。じ、自分じゃよくわかりませんの。そんなに似合ってるの……？」

亜莉沙は思わず、周囲を見回した。桃代や廉太郎以外も、彼女の

脚に見とれているようだ。

「うわー、ム力つくくらいキレイなんですけどー」

「かーっ、あんなにキレイな脚に飛び込んでみてーよ」

「……うらやましい」

「確かに似合ってはいるけど、どうも何か違うんだよなあ」

賞賛の聲が次々に上がる中、たった一つだけ空気を読まない批判的な意見が上がった。

その声の主は、今日は珍しくやや遅めの登校となった信二だった。廉太郎はそんな意見を出した親友に食って掛かる。

「信二！？ 何か違うって、何がだよ？」

「だって、これは瀬良さんが望んでやったことじゃないよね。半分以上、レンの押し付けだよ」

「まあ……な。ちつとは強引なところがあつたつてのは認める」

「でしょ？ じゃあそれは作られた美つてことだよ」

「ぐっ……。その通りだ……。作られたものより自然に生じる方が美しいに決まつてる……！」

「まあ、それが悪いことかどうかは別として。本人の希望とか意見がないまま進めるつてのは、何か違うんじゃないかなつて思ったんだ」

「叶……。お前、やつぱ言うことが一味違うな」

「僕は親友として、レンに自分の意見を言つたまでだよ。ところでミクさんはまだ来てない？」

「ああ、今日はまだ見てないな」

「そうなんだ、ありがとう。……瀬良さん」

「なっ、なんですよ」

「さつきはあんなこと言つたけど、僕も似合つてると思う。だから、もつと自信持つていいんだよ」

「……」

登校して、少し言葉を発しただけでその場の雰囲気を一変させてしまった信二。



そんな彼を見て、桃代は思索に耽る。

(くそ……。こいつがわかんねえ……。ちゃんと女の子を氣遣った言動できるんじゃないよ……。いや、これも『こう言っておけ』って思っただけの行動……?)

だが、そこはバカジョ。考えることに慣れているはずもなく。数秒後に考えること自体を放棄した彼女は、ふらふらと力なく自分の席に戻るのだった。

そして昼休み。前日の事件がなかったかのように、御供たちバカジョは信二と廉太郎を交えて昼食を始めていた。

「なあみんな。今度の連休のどれかにさ、どっか出かけない？」

こう提案したのは、桃代だった。もちろんこの行動にも理由がある。

学校以外での信二の行動をさりげなく探り、彼がどうして異性に対して歪んだ見方しか出来なくなったかを知るためだ。

その他にも御供と信二に楽しく過ごしてもらったり、単純に自分がこのメンバーで楽しく遊びたいと思ったということもある。

「お、いいじゃないか。オレは乗るぜ！」

「わたくしもですわー！ せっかくの連休なのですもの、遊ばないと損ですわー！」

「ボクもいいよ！ それで、どこに行くの？」

「あーえつと、本須原なんかどうかなって思ってるんだ」

「本須原！？ ホントに行ってるの！？ いいなら、是非お願いします！」

「おっ、乗り気だなー叶！ よっしゃ決まり！」

「でもどうしてそこなんですのー？ パワースポットの場所でもありませんか？」

「べつにー。つかセーラ、お前パワースポットにまで興味示すようになったのかよ」

「とーぜんですわー！ 流行りモノにはどんどん乗らないとですわー」

「あはっ、セーラらしいね。それでももっち、どんなところ行きたいの?」

「んつとねー、男装喫茶!」

「……へあ?」

御供の質問に元気よく答えた桃代だったが、廉太郎が不可思議な声を出す。

「なんだよー、その反応。それだけじゃないって、いろいろ見て回るよ。せつかくこの5人で初めて遊びに行くんだしさ」

「おおつと、いきなりいい話になりそうじゃん。しょーがねーな、天下の女傑様のご意見に乗っかるとしませうか」

「そうだね。鬼丸さん、誘ってくれてありがとう」

「……!?!」

おおつとここで信二きゅんの癒しスマイルだッ! しかもお礼の言葉のトッピングつき!

これには天下の女傑もたまらずノックダウンか!?

「ば、ば、バカヤロお前、そんなお礼言われることじゃないって!」

べつちいいいいいん!!!!

ぬぁんとここで! ももっちの照れ隠しチョップだ!!

額を紅く腫らした信二きゅんだが、その癒しスマイルは途切れな  
ああああい!!

「なんだよ鬼丸、照れてんのかあ? 耳まで真っ赤だぜえ?」

「う……うるちゃい!!」

「きゃー……!!……!!……!! ももっちさんが珍しく言葉を噛み  
ましたわー!! かわいすぎますわー!! むぎゅー!!」

「き、キマシタワー……!!……!! セーラー……!!……!! あ  
たと合体してえええ〜ん!!」

桃代と亜莉沙は、まるで最愛の恋人同士が行うような抱擁を交わ

す。

もう少し勢いが強かったらそのまま接吻までしてしまいそうな勢いだ。

「百合、だな」

「百合、だね」

「こんなやりとり、昨日もなかったっけ？」

「ああ、あったね。で、どうなのレン」

「いや、オレはアリだと思う」

「僕はなしかなあ。やるんならもっと徹底的にやって欲しいよね。

ミクさんも交えてとかさ」

「えっ！？ ボクまで！？ ダメだよー、ももっちとセーラはそー

しそーあいなんだから」

「ねえミクちゃん。あの2人って前からあんな感じ？」

「そうだね。でも3人で抱き合っつてのはいないよ。ボクとももっち、ボクとセーラ、今みたいにももっちとセーラが抱き合っつてのは結構あるよ。信二さんとレンくんが抱き合っつてないの？」

「「あるわけない！！！！」」

彼女らは日常的に百合っているので、同性で抱き合うことに抵抗が無い。

よって男同士も過剰に愛し合うものだと思っっているので、今みたいな質問が出てしまうのだ。

「ああ、かわいいよかわいいよセーラ。どうしてセーラはセーラなんだい」

「ももっちさんもかわいらしいですわ……。わたくしをメチャクチャにしてくださいませ……」

こういうことを人目もはばからずにやってしまうから、余計にバカと言われてしまう。

その事実にも、バカージョの3人は気づかない。何故なら彼女らは、バカージョだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5775o/>

---

おみくじ すくらんぶる！

2011年1月11日23時13分発行